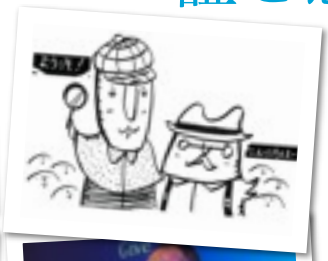
E N G L A N D / W Y B O S T O N

第２８回

ヨーロッパ　キリスト者の集い

証と感想



すべてを主に感謝して

横浜本郷台キリスト教会の細沼好子姉から

　このたび、キリスト者の集い英国大会に参加させていただき、ありがとうございました。「召しにふさわしく歩む」がメインテーマで、メッセージ、祈り、賛美と本当に時間があっという間にすぎていきました。

　日本から参加させていただき、すべて、整えられたなかに１００パーセント恵みを受け取る側に、いさせていただけた、なんと贅沢な恵まれたときを感謝いたします。準備から、最後の終了まで、担当してくださったかたがたに心からお礼申し上げます。

　「召し」にふさわしくということの基本は、神様と親子としての関係にあることをあらためて教えられました。救いの確信とは、なんだろうかとよく、私たちの間で話題になったりします。確信、それも神様と親子としての関係をしっかりもつところから出てくるものだと、信仰の原点にもどらせていただけました。また、「叫び」ということについても、心にとまりました。声にならない叫びを聞き取ることができるように、アンテナをしっかり立てる必要を感じました。

　帰りの飛行機の窓から、成田に近づくと、茨城沖でしょうか、翼のかげになりましたが、長い海岸線がくっきりと見えました。おだやかな海でした。この海があのような、津波の姿にかえられた一瞬があったとは信じられないほどでした。思わず、祈らずにはいられませんでした。

　この地にまだ苦しみの中に多くの方々があることを思うと自分は、なんと恵まれた数日をすごさせていただいたことか。この地の人々の「叫び」を、これからも受け止めていかなければならないと思わされました。

　先生方、また、奉仕されたすべてのかたがたに心から感謝をいたします。宿泊施設の職員の方々にもお礼申し上げます。

主の恵み

オーストリアはウィーン日本語キリスト教会の森美加姉から

第２８回ヨーロッパキリスト者の集い英国大会にウィーンから参加しました。キリスト者の集いに参加するのは初めてです。大学務めですので毎年８月は夏休みを利用して日本で過ごしていました。今年は６月から体調を崩し、長時間の飛行に無理があったためウィーンに残り、仕事も出来ない状態で、信仰の弱い私としては興味本位のような形でこの大会に参加しました。

『目からうろこ』の恵みをたくさんいただきました。今まで何度も「主と共に生きる」「喜んで主に仕える」という言葉を聞いていましたが、そうすることに何だかいつも努力を必要としていました。いつも一人で頑張っている感じがしていました。

　でも先生方のメッセージを聞き、多くの方がたの楽しそうな表情を見ているうちに、「全てのことを主と共にすれば良いのではないか？主が仰るから無理やりそうするのではなく、主の望まれることを主の下で主と共にすれば、楽しく無理なく積極的に出来るのではないか。」と気づかされました。何だか生活が楽になって頭が活性化したように思います。

「主と共に歩む」こんな私とも共に歩んでくださる主に心から感謝いたします。

他人を愛せない自分であっても

フランスはパリ日本語プロテスタント教会の冨永重厚兄から

英国ワイボストンで開かれたヨーロッパ・キリスト者の集いに家内と参加できましたことを感謝致します。プログラムはとてもよく準備されており、欧州各地の日本語教会の牧師方のメッセージに加え、日本から小坂忠先生をお招きしての賛美コンサート、そしてマケリゴット先生の特別講演と実に内容豊かな集いでした。この修養会を通して、とても他人を愛せない私であっても、私たちは主から愛されている存在であるが故に、隣人を愛することが出来るという「事実」を強く示されました。

私は「**あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。わたしは主である。**」**(レビ記１９：１８）**との御言葉を聞く度にそんなことは自分には到底出来ないと思っていました。しかし今回の修養会での先生方のメッセージを通して、確かに私たちには出来ないことであるが、主がまず私たちを愛して下さり、憐れんで下さり、赦して下さっているのだからそうしなさいと言われていることを示されました。「わたしは主である。」と言われた意味が少し理解出来ました。

今回はVIPクラブ@修養会が新しく設けられ、私もビジネスマンとしての証をさせて頂きました。３６歳で主を受け入れたにも拘わらず仕事の面白さの中で教会には行っていたものの、主の小さい御声を聞くことが出来ず霊的成長が困難であったこと、そして主の不思議な導きで銀行を退職した後パリに再度家族共々来ることが出来、経済的困難の中でヨブ記から励まされ、主を見上げつつの祈りに主は不思議なように応えて下さり、一年又一年とパリ滞在が許され１３年が経ったことを証することが出来ました。

今年は朝・昼・夕の食事の時間が２時間づつ取ってあり、普段お会い出来ない欧州各地の愛する兄弟姉妹方と心おきなく親しくお話が出来たことは素晴らしい恵みでした。そして施設と食事が何と充実していたことか。主催地ロンドンJCFの皆様に心から感謝申し上げます。ハレルヤ

冨永兄のVIPクラブ@修養会での証の録音があります。御本人の許可をいただきましたので配信できます。希望者は松林まで。

また参加したいです。

バルセロナ日本語で聖書を読む会は鈴木羊子姉から

仕事柄、夜型人間の私にとってはあり得ないプログラムの四日間でしたが、充実し楽しかったです。帰りも空港で待ち時間が結構あって、ミラノからきた方と一緒に過ごしました。また参加できたら嬉しいです。

イエス様は哀れみをもって

スイスはスイス日本語福音キリスト教会のゲルスタ牧師から

今回でキリスト者の集いに参加させて頂いたのは二度目となります。何人かの兄弟姉妹には初めてお会いできて嬉しかったです。特に男性のスモール・グループでの交わりは大変良かったです。男性同士として、御言葉を分かち合ったり笑ったりしました。

マケリゴット先生のお話しは大変参考になりました。マタイ２０：２９－３４での出来事です。群集は二人の目が見えない人をたしなめましたが、イエス様は二人の目に見えない人の叫びを聞いて彼らを癒してくださいました。多くの人は、痛みを抱いて、他の人に拒絶されたり、絶望的な状態にあったりします。しかし、イエス様は哀れみを持って二人を受け入れてくださいました。

最後にＳｔ．Ｎｅｏｔｓでの宿泊施設はとてもよかったと思いました。特に食事は最高でした。しかし来年のヨーロッパの集いでは宿泊施設は安くなることを願っております。そうすればもっと多くの兄弟姉妹が参加し、霊的な糧をいただくことができるでしょう。ＬｏｎｄｏｎＪＣＦの皆さんの尊いご奉仕を心から感謝しております。

心に迫ったメッセージ

ドイツはミュンヘン日本語キリスト教会の西迫佳子姉から

私は今回のヨーロッパキリスト者の集いに初めて参加させていただきました。今までも何度かチャンスはありましたが、仕事との兼ね合いなどで参加が叶わず、今回やっと参加出来ました。過去に参加された方々からは、毎年口を揃えて「修養会は素晴らしかった。」と聞いていましたので、とても楽しみに参加しました。

会場に到着すると、まずは雰囲気に圧倒され、さらにプログラムの充実ぶりにも圧倒されました。参加するにあたり奉仕についても考えましたが、「初参加」という言葉に甘え、純粋に一参加者として参加させていただいたことは、結果的に私にとってはかなりプラスに働きました。

参加前日、私はこれからの自分の歩みについて、ひとつの決断をしていました。すっきりした気持ちで修養会に参加しているはずなのに、日が経つにつれ自分の決断に迷いが生じてきました。「この決断は神さまの御心ではなく、私の思いが優っているのではないか？」と不安さえ感じていました。「そもそも御心って何?」正直そんなことも思いました。しかし神さまはこんな私にいろいろな人を通して、実にあらゆる方法で私に語りかけて下さいました。

『あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。』　詩篇37:5

私の全てをご存知である神様に対して疑いを持ったことを恥じました。そして全てを明け渡し、信頼して従っていこうと思いを新たにしました。

この修養会で私は、すべてのメッセージをその場で聴くことができました。メッセージはその場の空気をも含めて心に迫ってきます。日常を離れ、静かに神様の御前に出るとき、主は私のうちに生きて働かれるのを確かに感じることが出来たことも大きな恵みです。

最後になりましたが、心を尽くし準備された実行委員会の方々の働きに感謝します。そして何より大きな祝福を与えてくださった主に心から感謝します。

神様のことをより良く深く学べました。

スペインはバルセロナ日本語で聖書を読む会 下山泉紀 （中高科）から

2011年8月4日、長い間待ち続けたヨーロッパキリスト者の集いがようやく訪れては嵐のように過ぎ去ってしまいました。中高科として参加させていただいた私は、久々に同じ境遇にある気の合う友人達と再会でき、また新たに楽しい会話を交わることとなった仲間達と出会い、去年同様、非常に楽しい4日間を送ることができました。

昨年度より奉仕者が少ないせいか盛り上がりは少し欠けたものの、本大会では落ち着いた時間の中で私達中高科は神様のことをより良く、深く学べたと思います。また、今回はドイツ語圏からの参加が多く、共通の言語を持った多くの人達と通訳奉仕の方々のお陰もあって日本語を第一言語としない中高生も孤立することなく、皆で一つになり楽しめたと思います。奉仕者の皆様、中高生の皆様、そして本年度の修養会を最後まで温かく見守ってくださった神様に感謝します。

何よりも私に必要なテーマでした。

ドイツはハンブルグ日本語福音キリスト教会のＦｒｅｄｒｉｃｈ希與子姉から

冒頭でまず、ロンドンＪＣＦの方々に心よりお礼を申し上げます。また、そのほかの奉仕の方々も大変ご苦労様でした。主が皆さんを祝福してくださいますように。

クリスチャンらしく生きる、という主題は、何よりもわたしに必要なテーマでした。大きな期待とともに参加しました。先生方のどのメッセージもとてもよかったですが、忍耐、不屈の精神という日本人が大好きな標語が神様がいてくださるからこそ、実際に生きた言葉なのだ、ということが、良く解き明かされ、心に残りました。また、無言の叫びを聞く耳をもつように、というマケリゴット先生の講演は、心に深く染み入りました。いつも忙しさを盾に、耳にふたをしている自分がそこに示されました。

スモールグループもたっぷりと時間があり、お互いに良く知り合うよい時でした。会場も広々としていて、静かで、何もかも申し分のない、すばらしい集いでした。「遠き国や」などを一緒に賛美できたその時間もすばらしかったです。被災地に心を向けることができました。

ブルーリボンの祈り会で、拉致被害者の方々を思いつつ、心を一つにして祈るひと時も与えられました。本当に感謝です。ドイツ人の夫も度々同行していますが、今回は、毎回の礼拝に参加していたようです。同時通訳をしてくださった、ナイツェル先生、有難うございました。

スモールグループも、最後は、ビールで締めくくったようですが、夫はすべてに参加していました。いつもは、アウトサイダー的行動を取ることが多いので、心の中で、参加するように、お祈りしていました。神様がわたしの祈りに応えてくださったのです。

日本から、呼び寄せた姉も一緒に参加しました。普段は自分の教会の奉仕が忙しく、日曜の礼拝も場内整理などをしていて、ゆっくりとメッセージを聞くチャンスが少ないということです。この集いで、たっぷりと御言葉に浸るときを与えられたと言って、大満足で帰国しました。日本から、集いに家族を呼び寄せることも本当に恵みだと思いました。

ケンブリッジの町の観光も大変よかったです。ガイドをしてくださった方々ありがとうございました。（お天気まで、観光用に準備してくださっていて！）今回は、同じ教会からの参加が井野先生とわたしの２名だけだったのが、寂しかったです。でも、これから、留守番組に、配信された記録を聞いてもらい、分かち合いを少しずつしていきたいと思います。

帰独の時期に、ロンドンやそのほかの町で青少年たちの暴動があり、この度観光で訪れた町角も被害地域に上がっていて、イギリスの抱える問題が、断絶の時代の象徴であり、愛のない時代になってしまった現代の闇の部分をどう受け止めたらいいか、真剣に祈りたいと思わされました。最後にもう一度お礼を申し上げます。

すばらしいときを与えてくださった神様に、そして、労をとってくださった方々に。

祝福に満ちた恵みの分かち合い

スイスはスイス日本語福音教会のヘス明美姉から

今年の集いは、イギリス・ケンブリッジ近郊にあるセントニオツで開催されました。ホテルのある宿泊施設には、ゴルフ場・プール・フィットネスクラブ・湖など魅力的な場所が沢山ありましたが、プログラムがぎっしりと用意されている私達にはそこを使用する機会はあまりなかったのが、少し残念に思いました。

でも毎食の豪華な食事（ここは本当にイギリスか？と思うくらいメニューが豊富で美味しかった！）に、恵みあふれる先生方のメッセージ、そして小阪忠先生の讃美コンサート、スモールグループの交わりも毎回祝福に満ちた恵みの分かち合いが持たれ、大変感謝しています。

時を同じくして、ロンドンで始まった暴動に関しては、とても心を痛めていますが、こういう時こそ祈りと御言葉が必要と改めて思わされました。ともかく誠心誠意を尽くして準備に当たってくださったJCFの実行委員の方々に、主の豊かな恵みと祝福がありますようにお祈りします。そして本当にご苦労様でした！

すべてを喜ばれる主に感謝して

ドイツはハンブルグの工藤篤子姉から

私の賛美者としての歩みは、この「ヨーロッパ・キリスト者の集い」（以降ECCと表記）の賛美奉仕を通して学び育まれてきた、と言って過言ではないと思います。年に一回のこの奉仕を通して、またこの奉仕のために、「礼拝賛美とは」、「主に喜ばれる賛美とは」、「しもべとしての生き方とは」、を祈り求めて来ました。そして、これまで学ばせていただいたことが、AKWMの賛美伝道のあり方にもつながってきました。

2007年のミラノECCにおいて、ミラノ日本語教会の牧師夫人であり、またプロのチェンバロ奏者＆オルガン奏者である内村まり子さんは、主の導きの中で、全大会のプログラムで会衆賛美をリードする「賛美隊」を組みました。

祈り、賛美、みことばの解き明かしによる講演のひとつひとつが主に捧げる「礼拝」となるべく、奉仕者が霊的一致をもって仕え、全大会が御霊にある調和の中で進められるためでした。賛美隊は、賛美奉仕だけでなく、ひとつのスモール・グループとしても、共に分かち合い、祈り合う時を持ちました。この交わりを通して、私たちはプログラムを追うごとに一つとされて行くのを感じました。

私はこの時に、皆で心を合わせて賛美奉仕をする醍醐味を味わいました。それは、十字架を見上げ、へりくだって神に仕えようとする者たちに主が与えて下さる導きと、そこに満ち溢れる恵みでした。そして、そのように皆で賛美をリードし、会衆賛美とひとつとされて行くときに、仕える者たちが真っ先に触れさせていただける礼拝の祝福、喜び、感謝でした。

その後、フィンランドECC、マドリッドECC、そして、今年のロンドンECCでは、内村まり子さんとともに、賛美チームのコーディネーターとして奉仕させていただきました。

全プログラムの賛美を準備するには、数か月を要します。祈り、選曲、たたき台作成、各メッセンジャー、大会委員との打ち合わせ、楽譜作成、楽器/声部編成・・・。そして大会が始まると、自由時間のほとんどを練習に当てます。世界で活躍する一流アーティストも、音楽を学んだ経験のない人も、ここでは、皆同じ「キリストのしもべ」として謙遜に仕えるのです。

一年ぶりに逢う人たちとも思うように交わりの時を持てず、朝早くから夜遅くまで、4日間、時間的犠牲を捧げて賛美奉仕をするわけです。「こんな大変な奉仕はいや」と、メンバーが集まらないかもしれないと思ったこともありました。けれども、今年も、１９名もの方がこの奉仕に加わってくださいました。中には、「チームの交わりが素晴らしいと聞いたので」、と参加を決意した方もおられました。

「今年の賛美チームは格別に素晴らしかった」、と、あえて書かせていただきたいと思います。実は多くのメンバーが、課題をかかえて集まりました。震災で家を失い家族がバラバラになった人、病いを持つ人、声が出なくなった人（複数）、試練の中にある人・・・。しかし、それを主からの課題として真摯に受け止め、分かち合い、祈り励まし合い、主のみ声に耳を澄ませながら、自分を無にして共に心を合わせて仕える姿に、私は深い感動を覚えました。そのように「砕かれた霊」によって捧げる賛美を、主は喜んで受け取ってくださったと思います。

今年の奉仕と交わりを通していただいた学びを、私たちのこれからの歩みの中で、主がどのように花開かせてくださるか、みなさんと分かち合えるその時を、今から楽しみにしているところです。

赦すということ。

オランダは中部集会の村岡崇光兄から

最近の英国大会で、諸先生方から貴重なことを多々教えて頂きましたが、安藤師による「哀れまれたように」と題するお話から学んだこと、考えさせられたことをここにお分ちしたいと思います。

安藤師はマタイ１８：２３−３５にある、主イエスが語られた有名な譬えから話され、私達誰しも、赦しを必要としていると同様に、他者を赦すことをも必要としている存在であることを力強く語られました。聖書の教えの真髄かと思います。師は、この譬えは、自分に対して罪を犯した兄弟を何度まで赦したら天国の住民として合格点が貰えるのでしょうか、と弟子ペテロが問うた質問（２１節）に対する答えとして主イエスは語られたのであることも指摘されました。聖書箇所のよりよい理解のためにはその文脈を考慮に入れることの重要性を教えられました。

ところで、ペテロが出した質問にも文脈があります。「**もし、貴方の兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って、二人だけで会い、彼を諫めなさい。もし相手が貴方の言い分を聞き入れたら、彼はまた貴方の兄弟になったのだ**」（１５節）で始まる赦しと和解についての教えにペテロは一つの疑問を抱いたのでした。続く１６、１７節で、罪が介入したがために壊れた人間関係を如何にして修復するのか、加害者が赦され、被害者との間にどのようにして和解が成立するのか、それに至る手順を主は教えておられます。

天国の譬えの中でも、王の家来は自分が一万タラントというとてつもない負債を王に対して背負い込んでしまったという明確な自覚があり、王の前に平伏低頭し、地面に顔をこすりつけて恩赦を懇願しました。同僚の家来も、借金の額こそ僅少でも、すぐには返済の目処の立たない自覚がありましたから、これも平伏低頭して恩赦を懇願しました。

あるクリスチャンが、知人の裏切り、背信行為に深く傷つき、相手が赦せない自分に長いこと悶々としていたけど、主の語られたこの譬えに鑑みて赦すことにして、深い平安を取り戻した、と語られました。それを聞いて、その相手の人に問題点をはっきりと指摘して、相手はそれを認めましたか、と私がお尋ねしたところ、「否」でした。相手は、自分が何か悪いことをしたという自覚も無いのではないのか、ということでした。

十字架上で、想像を絶する苦悶のなかから、胸の奥から絞り出すようにして「**父よ、彼等をお赦しください。彼等には、自分が何をしているのかの自覚も無いのです**」と言われた主ご自身の辞世の言葉の一つが思い出されます。「あなた達が、他人を赦さなかったら、あなた達の天の父もあなた達の過ちを赦して下さらないであろう」（マタイ６：１５）と教えられた主にとって、この執り成しの祈りしか祈れずにこの地上を去らなければならなかった無念さは察するに余りあります。

しかし、加害者の側に罪の自覚要が無く、赦されることの必要を認識していなければ、被害者が一方的に赦しを宣言することは出来ません。「**彼等がこの罪の責任を問われるようなことになりませんように**」（使徒７：６０）と祈って息絶えたキリスト教会最初の殉教者ステパノの祈りも同じではないでしょうか。

「**私の最初の弁明のとき、誰一人として私のところに駆けつけてくれたものは無く、みんな私を見捨てた。そのことが彼等のマイナス点となることがありませんように**」と使徒パウロは祈っていますが（第二テモテ４：１４）、問題の信者達がその後、パウロに赦しを乞うたかどうかは聖書は記していません。

相手を一方的に「赦す」ことによって、怒りや、憎しみ、恨みという桎梏から開放されたら、被害者にとっては素晴らしいことかもしれません。でも、加害者と被害者は向き合う必要があります。聖書は、両者は神の前で向き合わなければならない、と教えているのではないでしょうか。

預言者ナタンに自分の罪を自覚させられたダビデ王は**「私は主に対して罪を犯した」**、と告白しました（サムエル下１２：１３）。「私はウリヤに対して罪を犯した」とは言いませんでした。自分の命令によってウリヤは既に殺害されていましたから、彼に赦しを乞う術もありませんでした。

数年前にロンドンの地下鉄であった連続爆破事件で愛する一人娘を失った母親が英国教会の聖職者で、自爆した加害者に会うことも出来ず、悶々とした日を送っていましたが、毎週教会で聖餐式の司式をすることに堪えられなくなって、辞表を出した、ということを聞いたことがあります。

私達の間での罪の赦しが可能となるためには莫大な代価が払われました。罪を知らない、神の仔羊の命でした。しかし、それは、神の義が要求するものでした。一万タラントの要求でした。義の要求も、赦しの代価も実に厳しいものでした。**「愛と真実とは歩み寄り、正義と平和は手を取り合った」**（詩篇８５：１１）とは、主イエスがかかられた十字架とは神の正義と慈愛とが交わるところ、ということではないでしょうか。

壊れた関係の修復、これは個人間の問題に限りません。集団の関係にも適用出来ます。民族間、国家間の抗争、軋轢、それがもたらす甚大な損害。修養会での早天祈祷会の祈祷課題としてオランダ中部地区は、日本の戦争責任、周辺のアジア諸国、日本が戦った連合国側との間の問題は未だにほとんど手つかずに放置されていることに皆さんの注意を喚起しました。

６６回の敗戦記念日を明日に控え、このことにも思いを新たにさせられます。もうそろそろ忘れてくれ、と日本が期待、あるいは要求することは許されません。戦争の出来るような、軍事大国に日本はなるべきだ、と公言するような人物を都知事として二期も務めることを許して来た私達の責任も問われています。

ロンドンの夏
オランダは日本語キリスト教会の大島邦夫兄より

まず、今年のロンドンでの集いが、小さな反省はあったとしても、大きなトラブル、事故などがなく、無事に終了できたことは、皆様と共に感謝いたします。また、この集いの準備にあたってくださった多くの皆様に対して、本当にありがとうございました。

僕自身、参加することができてとてもよかった、と思いました。それぞれの福音に満ちたプログラムにおいて、多くの祝福を受け、励まされたこと、そして、神さまが用意してくださったさまざまな方々との出会い。それらは、ささやかではありましたが、望外な喜びを与えてくださったと感じ、感謝いたします。

この、年一回の夏の集いですけれども、毎回それぞれの担当教会が自由な発想で、知恵を絞って、準備してくださっています。その前提にあるものは、神さまと共に、みんなが「信頼」を寄せていること、だと思います。

福音のもとに、経験をふまえながらも、若い人や、新しい人たちの斬新で、柔らかなアイディアを生かしていくことができたらば、この集いの可能性は、さらに広がりを持っていくのではないか、と信じています。

行為と信仰は車の両輪。

香川県は善通寺バプテスト教会の浜島敏兄から

私が、「ヨーロッパ・キリスト者の集い」に参加するのは、今回で　5回目である。最初は1996年、私がロンドンに滞在していたときで、第13回ドイツのムッフで行われた集いに参加した。私の記憶では、その時からか、あるいはその次からか、現在の「ヨーロッパ・キリスト者」に名称が変わった。それまでは、どこかに「日本」が入っていたように思う。日本人以外の参加者が増えたことによるものであろう。

帰国してからは、参加したいと願いつつも、休みが取れなかった。以前は日本でもよくあるように、修養会と言えば、大体8月の中旬、お盆の頃であったが、いつの間にか8月上旬になってしまっ　た。大学はまだ授業中であり、仕事を休むわけにはいかなかった。

定年退職して、多少時間の余裕が出来た2007年のイタリアのミラノ、2008年のドイツのヴィッテンベルク、2009年のフィンランドのヤルベンパーと続けて三回出席した。昨年は他の事情があって参加できなかったが、今回はロンドンJCFがホストをするということで、どうしても出席しなければと思って参加した。

霊肉ともに　大変恵まれた。大自然の中、野うさぎが走り、白鳥が泳ぐケンブリッジ　郊外セント・ニオツであった。なだらかな丘、芝生と木々の茂るキャンプ場で久しぶりに吸うイギリスの空気はおいしかった。食事もおいしく、その栄養分はたっぷりお腹の脂肪として蓄積した。それと同じぐらい霊の糧は蓄積できただろうか。ちょっぴり不安である。

ヴィッテンベルクからであろうか、スモール・グループによる時間が増えた。フィンランドの時はほとんどの行動がこのスモール・グループで行われた。グループ内での交わりが深められるのは大変有意義であるが、多少の工夫も欲しい。中にはこのような小グループが苦手の人もいる。同時並行で、違うプログラムも組めないものか。

それと、今までのグループの分け方を見ていると、年齢も性別も、大体似たもの同志のグループとなる。むしろ、いろいろミックスしたグループを作るのも良いのではないか。あるいはグループの人数をもう少し増やして、10人位にしたらどうだろうか。口下手なものも、あまり気兼ねしないで「話させられる」恐怖から解放される。

来年はオランダ、できたら出席したい。ゴーダ（本当は「カウダ」）チーズをたっぷりまたお腹に溜めたい。今年のテーマが「クリスチャンの生き方」、来年が「地の塩」。大変重要なことであり、ともすると信仰の陰に隠れて、二の次にされることがらである。

しかし、同時に、注意しないと「行爲」に焦点が行き過ぎて、信仰の本質からそれてしまう　危険性もある。信仰と行いは車の両輪、左右のバランスが取れてこそ安定する。片方の車輪が極端に小さければ、積み荷は崩れる。小さい車輪　の方に車は倒れる。またたとえ平均が取れていても、車輪が小さければ、重いだけで力の割りには車は進まない。車輪が大きく（信仰の成長）バランスも取れていると、車は軽い。楽しい信仰生活になる・・・わけだ。分かっているけど、なかなか難しい。このあたりの　秘策をオランダでは教えて欲しい。

忍耐を試されたとき

英国はロンドンJCFの豊川姉より

修養会に参加するのは３回目になりましたが、今年は主催側にまわるという大役を与えられ、初めは果たせるかどうか、不安でした。私生活の上で本当に忙しい時だったからです。

委員の任を与えられた時、予め委員の皆様にはまったくかかわれないだろう時期をお伝えして臨みましたが、個人として与えられた道を中途半端にしないように行うことは私にとってかなりのチャレンジだったので、修養会が始まった時は本当にほっとしました。

修養会開催までの道のりはまさに内村先生がお話された”忍耐”を試された時期でした。主の導きを大切にしなければならないのに、つい忙しいからと事務的になってしまったりつぶやいてしまったり。主催側と各諸教会・集会との窓口として何をどこまでやればよいのか模索する中で温かいお言葉を頂いたときは本当に感謝で一杯でした。

修養会ではなかなか交わりの時間や礼拝に参加することが出来ませんでしたが、ひと時参加できたスモールグループや質問をされた方とのやり取りがとても印象に残っています。また、修養会を満喫された方々の感想を聞くだけでそれまでの労が報われた気もしました。

最後に今回連絡係として、皆様が必要としていた情報を満遍無くお伝え出来なかった事をお詫びいたします。それにも関わらず、覚えてお祈りいただいた事を心から感謝いたします。

ガハハと涙を流して笑ったり

ドイツはシュトゥットガルト
日本語教会の増谷啓より

毎年の一大イベントから一週間が過ぎようとしていますが、まだ感動の余韻に浸っています。多様性を愛される神様が、老若男女・大小の教会・色々な国籍・信仰のスタイルを持った私たちを今年も一箇所に集めて下さりました。この自発的で「ゆるい」集まりが頼りなく感じる時もありますが、イエス様にかかるとキラキラ輝きだし「今年も来てよかったなぁ」と確信に変わります。

例年は写真係として会場を駆け回っているのですが、SGリーダーのご奉仕にあずからせていただいたおかげで、本大会のメッセージにもじっくり聞き入ることができました。普段は頭でっかちな信仰を持っている私ですが、讃美チームの歌に感動して涙したり、マケリゴット先生の日本珍道中にガハハと涙を流して笑ったりと、意外な自分の一面も神様は見せてくださいました。子供たちにとっても一年に一度のCS（長女は今年から中高科！）なので、先生方の献身的なご奉仕には本当に感謝しています。

見えるところ、見えないところでコツコツとご奉仕をされていた実行委員の皆様、そして彼ら／彼女らを支えてくれたご家族の皆様、本当にありがとうございます。来年もお目にかかれることを楽しみにしています。

流れを感じさせる集いでした。

フランスはパリ日本語プロテスタント教会の
作田銀也兄から

今年も家内と共に集いに参加できたことを主に感謝いたしました。車椅子持参の不便もありましたが、よく企画されたプログラム、多くの方々との再会、新しい方との素晴らしい出会いにより大変恵まれました。賛美チームに加えていただいたため、家内のフォローが十分にできず寂しい思いをさせてしまったことも事実です。ベビーシッターだけでなく、年寄りや体の不自由な人の面倒を見るサービスが必要になるかもしれませんね。

集いも28回を迎え、奉仕者の世代交代にも、そういう時代になったのだなぁ、との流れを感じさせる集いでもありました。講壇に立たれた先生方の良く準備された素晴らしいメッセージ、賛美チーム、また特別参加の小坂忠師の賛美、マケリゴット師のメッセージなど心にしみわたりました。ただ、何名かの証の時が同じ時間帯にもたれたのは残念に思いました。

これからも背景の異なるクリスチャンが他の教会集会、また求道中の方々にも思いを馳せ、素晴らしい集いが続くことを心から願います。ロンドン、ウインブルドンの皆様本当にありがとうございました。2年後の2013年は記念すべき第30回大会になります。担当のパリ教会も心して祈りつつ準備させていただきます。その前にオランダがあります。いずれも、乞うご期待

奇跡の現場に巻き込んで下さった主。

英国はロンドンJCFの巖埼友美姉から

私は今回の修養会で、中高科の奉仕をさせていただきました。修養会に参加したのは初めてで、どんなことをするのか、イメージもよく持てないままケンブリッジへやって来たのですが、いざ奉仕に入ってみると、これは大変なところへ来てしまった、と思いました。

十代の彼らは、繊細で、やわらかくて、神様のことをものすごく知りたがっていて、それでいて不安で、疑いを持っていて、それを真っ直ぐにぶつけてくる子もいれば、言わないけど目の中に燃やしている子もいました。私の中にもまだある、そういうモヤモヤしたものと、彼らのそれが微妙にリンクして、なんだかとても揺さぶられました。正直、中高生のグループディスカッションをリードするどころか、「神様、私のこと倒れないように支えてください！」と祈りすがるのが精いっぱいでした。

「あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。ただし、優しく、慎み恐れて、また、正しい良心をもって弁明しなさい。（Ｉペテロ３章より）」

というみことばが厳しく胸にせまると同時に、少しずつ、ぽつぽつとだけれど、イエス様の十字架のこと、救いのことを私なりに話そうとするうち、足りない言葉なんだけれども、それでも話せば話すほど、神様の愛があまりにも大きいこと、神様が全てにまさるものであること、私には神様しかいないこと、そのことだけがどんどん自分の中で確かにされていって、それが大きな恵みでした。

この４日間の濃い時間を通して神様は、「私はあなたの父。あなたが私と一緒に歩むために、私はあなたを生んだのだ」とつねに語り続けてくださいました。人生最後の日まで、ずっと神様と一緒なんだという嬉しさと、でもまた、日々なんとキリストの方を見つめずに行動することの多いことか、そのためにどれだけの失敗をしていることか、という自分への苦さと。ただただ、「今日もあなたと並んで歩かせてください。願わくはあなたを証しできる生き方をさせてください」と毎日毎日祈っていくしかない、祈っていきたい、と心から思いました。

最後の日の、中高科の賛美発表。みんなのキラキラした目と、お互いを思いやりながら共に賛美している姿の一つ一つをみて、こういうやさしい心を、賛美の心を、神様がひとりひとりの中へ与えて下さっていることへの感謝があふれました。とても元気をもらいました。なにも分からずにここへ来た小さな私を、主がこの奇跡の現場に巻き込んで下さったこと、感謝でした。

神様ってすごい！

京都はニューライフキリスト教会の赤津ジュリア姉から

礼拝、賛美、交わり、コンサート、、、全てが恵みの連続でした。震災後、ブルガリアに避難移住した家族を訪ねようとヨーロッパ行きを考えていた私に、イギリスで開かれる修養会に、同じ教会員の方が誘ってくださったのがきっかけでした。

そして賛美チームでのグループ奉仕を希望して参加を申し込みました。このタイミングで参加することができたことだけでも本当に大きな不思議ですが、たくさんの方々の温かい働きかけとご厚意で、コンサートと証しの機会まで与えられました。

演奏した曲の一つにＪｕｐｉｔｅｒがあります。これは二年ほど前に、大好きなホルストの名曲を、私が自分なりの解釈でピアノのためにアレンジしたもの、、、ホルストはイギリスの作曲家です。まさか作曲家の生地で演奏することになるなんて、、、、「神様ってすごい」そんな叫びたくなるようなつぶやきが連続した四日間でした。

新しい兄弟、姉妹との祈りや分かち合いを通し、困難にあっても、キリストの光を持って歩む事が可能なんだと改めて再確認し、励まされた修養会でした。

神の家族の輪が広がっていきますように！

京都はニューライフキリスト教会の杉野まり子姉から

実に10年ぶりにこの大会に日本から参加させて頂くきっかけは、現在ロンドンで勉強中の娘と一緒に参加させて頂きたい願いからでした。娘は14年前のドイツでの大会参加をきっかけに13年前に受洗したので、私たち母娘にとってこの大会には、帰国後も特別の思いがありその日を心待ちにしていました。

ところが神様はもっと素晴らしいご計画を用意しておられました。それは、実の娘ではなく、震災後に知り合ったばかりの娘同然のピアニストさんと同行することになったからです。彼女の名は、赤津樹里亜・ストヤーノフさんといい、9歳でピアニストのお母様を亡くし、今回大震災で親戚、故郷を失い、お父様ご家族とも震災後ブルガリアと日本との離れ離れの暮らしとなり、愛用のスタインウェイのグランドピアノすら手放さざるを得なくなった、ピアノのないピアニストさんだ。

彼女のコンサートを2回聞いただけで、私は彼女の音楽と証しに特別なものを感じ、心を動かされました。その後、不思議な神様の導きで、私の家を練習場として提供するうち、彼女の素晴らしい人柄にも心を打たれるようになり、神様が特別な才能と使命を託しておられる主の器と確信するようになりました。

”こんな大会がケンブリッジであるのだけれど、一緒に行きませんか？”とダメ元で誘ってみると、なんと行けることになったばかりでなく、今回の主催者の特別のお計らいで、ミニコンサートの場も提供して頂くことになりました。

彼女は芸術家に課せられた特別のストレスからか、2度も不治の病の宣告を受けながらも、奇跡的に御手によって癒されるという体験を持ち、今まで大切に握りしめていたものをすべてもぎ取られるという過酷な人生体験が、すべて彼女の中で、信仰によって練り清められた品性として宿っています。そこから奏でられる魂の美しい調べを、今回、多くの方々に聞いて頂けた事は、私にとっても素晴らしい恵みの機会となりました。万難を排してその場を提供して下さった主催者のご高配に心から感謝いたします。

今年のタイトル：召しにふさわしい歩みは、考えるだけでなく、この大会に身を置くことでミニ体験をさせてもらった感があります。よく準備された素晴らしい賛美チーム、各地に遣わされた先生方の素晴らしいメッセージの数々、ロンドンＪＣＦの有能なマネージメント、どれをとっても素晴らしいものでしたが、その陰で人知れず愛の奉仕をされている体の節々の働き無くしては、体全体は機能しなかったと信じます。種々の相違を越えて一つとされた神の家族としての麗しいハーモニーと、イエス様を頭とする愛の命が大会全体に流れていました。

持ち場に戻った今、メッセージからチャレンジされたように、どんなに忙しくなったとしても、助けを求める周囲の“叫び”に歩みを止め、その声なき声を聞きとっていける者でありたいと切に願わされています。皆さん多くの励ましと温かい兄弟愛をありがとうございました！

ケンブリッジで3年暮らし、帰国して10年の私に与えられている一つの特権として、帰国者のお世話があります。日欧の教会のギャップを乗り越えて各自に相応しい教会にしっかり繋がっていけるように、又人を頼りにする状況から真に主ご自身に繋がれるように、各自の心が新たな神の国の価値基準にしっかり創りかえられていくように、を目標に、この10年、度々失敗も経験しながらも、欧米から帰国された方々との交わりを通して、大きな恵みに預かっています。京都に近辺に帰国される方がありましたら、どうぞ又ご紹介ください。Wybostonで味わった神の家族の輪が、更に各地に広がって行きますように！！

日本のリバイブルを願って
埼玉は秋津福音教会の小坂忠 牧師から

この度修養会で奉仕させていただけた事は私にとっても大きな喜びでした。今まで海外に行っても日本人教会で御奉仕する事は少なかったので、特にヨー ロッパは初めてでしたので、多くの日本人キリスト者とお交わりが出来て嬉し かったです。皆さんのそれぞれの人生ドラマを聞かせていただいて感動でした。

同 世代、良い響きですね。同じ時代を生きて来た者同士が神のドラマのなかで出 会い神の家族としての交わりが出来る。嬉しい限りです。

私は日本のリバイバルを願って音楽での宣教活動を続けて きましたが、今、日本でも外国人宣教が、海外でも日本人宣教が出来る時 代。目が開かれました。主の守りと祝福を心から祈ります。

第28回ヨーロッパキリスト者の集いまでの歩み

実行委員長　馬場重信

あっという間に過ぎ去った4日間でした。この4日間のための準備に1年半の歳月を要しました。ここでの道のりは決して平坦なものではありませんでしたが、神様の導きと数えきれない沢山の恵みをいただき、個人的にも教会全体としても信仰的に成長できたのではないかと思います。断片的ではありますがそのいくつかの恵みを分かち合いたいと思います。

牧師交代:２０１０年４月、ロンドンJCFは長年主任牧師をされていた盛永進牧師からピーター・ヤング牧師にバトンタッチしました。牧師交代のプロセスはその数年前から続き、ロンドンJCF委員会は修養会実行委員会を立ち上げる余裕はありませんでした。私が実行委員長に任命されたのが２０１０年３月。旧委員会から引き継いだものは２０１１年８月開催という日程と決定済みの会場との契約書のみでした。教会として大きな転機を迎えていた真っ最中、最初は右も左もわからない状態からの１人だけでのスタートでした。

修養会の歴史:まず最初に着手したことはヨーロッパキリスト者の集いの歴史を学ぶことでした。感謝なことにロンドンJCFには第３回大会以降の資料が多く保管されており、どのような経緯で修養会が発展し守られてきたかということを覚えました。ヨーロッパ各地に主につながる群れとして立てられた各教会、集会が主にあって一つであることを確認し合い、これまでの歩みを振り返って感謝し、今後の各集会、そして信徒一人ひとりの歩むべき道を御言葉から学ぶ。このヨーロッパキリスト者の集いの根本的な姿勢は２８大会を数えた今もそのまま受け継がれています。

２０１０年マドリッド修養会と実行委員会の設立:

当初準備を進める中でなかなか教会が一つになれない苦しい状況を打開するきっかけとなったのはやはり修養会でした。マドリッド修養会にはロンドンより数多くの信徒が参加し信仰に燃やされ帰国しました。実際に修養会を体験することで、何をしなければいけないのかが見えてきた教会員はやる気満々。その勢いで意見交換を重ね、実行委員会設立までこぎつけました。

スカイプ会議:１０月から１２月の第２信発行まではスカイプを通して毎週会議を重ねました。それぞれ仕事や学業、家庭もありますから会議は夜１０時から。会議は夜中１時に迫ることもしばしばありました。各実行委員の担当も決まり、仕事が割り振られ効率よく準備が進められました。なかでも特に参加費の件に関しては議論が数週間に及びました。英国という地での開催において大きな問題は参加費の高騰でした。祈りをもって知恵の限りを尽くして参加費を抑えられるように試行錯誤しました。とにかく１人でも多くの方に参加して修養会の素晴らしさ、神様の恵みに預かってほしいというその思い一心でした。

数多くの教派の壁を越え、実に具体的な形で主は一つであり、信仰は一つ、バプテスマは一つであることを体験できるヨーロッパキリスト者の集いは大きな恵みです。来年以降もこの大会が神様の栄光を表す素晴らしいものとして用いられていくことを心から主に期待します。

主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ　エペソ４・５

奉仕者が与えられる:実行委員会以外にも多くの奉仕者が与えられました。昨年に続き工藤篤子姉、内村まり子姉に賛美担当をお願いしました。ウィンブルドン日本語礼拝の提案で小坂忠先生をお呼びすることにもなりました。また１０年近いブランクがあるにもかかわらず、マケリゴット先生が特別講師の依頼をお受けくださいました。神様は賛美とみ言葉を中心とした修養会へと導いてくださいました。他にも多くの企画、作業が増える中で奉仕者が続々と与えられました。ぎりぎりになって急に奉仕をお願いしてしまった方々、連絡が十分行き届いておらずご苦労なされた方々、この場をお借りしてご奉仕心より感謝いたします。

家族の支え:実行委員長のとしての働きは家族の支えなしにはありえませんでした。４月に第一子を出産した妻は妊娠中、また出産後も私の専属秘書として私の手の届かない業務はすべて引き受けてくれました。私が仕事から戻るとその日の進み具合の報告をもらい、私は夜遅くまでさらに作業を進めるという毎日でした。スカイプ会議の議事録も娘の授乳の時間を調整して、片手にはペンを、もう片手には娘を抱いて会議に参加してくれました。娘もパパとママが忙しいのが分かるのか、スカイプ会議やその他の作業中は静かに椅子か膝にすわって我慢してくれました。このような影で支えてくれた奉仕者の方々は他にも大勢いることでしょう。そのすべてを神様はご存知でいらっしゃいます。神様の豊かな恵みがありますように。

大会を終えて私が最初にヨーロッパキリスト者の集いに参加したのは１９９８年ドイツ。ケルンでのことでした。当時中高生科にいた私は多くの説教を聴いて感動し、竹とんぼを作って飛ばしたら目に直撃して痛かったという衝撃的かつ感動的な修養会デビューでした。その１３年後、まさかこの修養会の準備の中心に自分がいるとは思いもしませんでした。神様の不思議な導きと大いなる恵みに感謝します。ここでは修養会までの歩みとして簡単に記させていただきましたが、私自身大会中は忙しすぎてほとんどメッセージやイベントに参加できませんでした。これから配信されている説教をきいて遅ればせながら霊的にも恵まれたいと思います。